

巻頭言 「人生は舞台」

宇野 元

子どもの頃、テレビでよく欧米の映画を見たものです。なかでも見る機会が多かったのはアメリカ映画でした。映画の内容によって、高層ビルのオフィスだったり、学校の教室だったり、前線の小屋だったり、状況はいろいろながら、人々が集まって話し合いをするときの様子が印象的でした。リーダーは机に腰掛けて足を組む。チームメンバーたちはしゃっちょこぼらず、思い思いの姿勢。話の途中でも自由に発言する……。そんな行儀の悪さに70年代の日本の少年は目を見張りながら、素敵な「芝居」だと思っていました。ところがあとになって、俳優たちは現実を模倣しているのを知ったわけです。また、チームが困難にぶつかると、誰かが明るいセリフを言う。なるほどシェイクスピアの子孫たち、と膝を打ちます。

「人生は舞台」。この言葉は真剣な内容をもつ。役を演じるというより、むしろ役柄に徹するという意味に近いかもしれません。世に生まれたからには、人生という舞台において、誰もが役を与えられている。自分の役に徹する。舞台に幕がおりるその時まで。

ウィリアム・シェイクスピアが生まれたとされるのが、1564年。おなじ年にジャン・カルヴァンが亡くなりました。興味深い符合を感じます。カルヴァンの神学とシェイクスピアの戯曲をむすびつけるのはあながち荒唐無稽な連想ではないでしょう。人間の営みの間には、ジャンルの垣根をこえた不思議なつながりがありますから。

人生は舞台。このことは、始まりがあり終わりがあるとの理解が明確であってこそ、真剣でしかも励ましに富むものとなるでしょう。人生の舞台は虚空に浮かぶ幻の舞台ではありません。それをまさにカルヴァンが教えてくれます。私たちの舞台は堅固な土台の上にある。神の言葉が土台です。そして私たちはライトに照らされた舞台に孤独に送り出されるのではない。暗闇を前に演じるのではない。たえず愛のひとみが注がれている。

新約聖書が語る舞台のイメージは、古代ローマ時代の劇場でしょう。舞台のまわりを観客が取り囲んでいる。先に天に召された人々が見守っている。「おびたしい証人の群れに囲まれている」(ヘブライ 12, 1)。そして私たちの人生の主であり父である方が見ておられる。役を行う私たちを喜びとしておられる。